

たわらもと2013発掘速報展

奈良盆地の開拓史



唐古・鍵考古学ミュージアム
KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

2013.4

はじめに

寺川と飛鳥川にはさまれた平野部は、大王の直轄地「倭屯倉」が置かれた場所とされ、王權の経済基盤を支える重要な地域でした。特に、保津・宮古遺跡とその周辺は、現三宅町域から田原本町多にかけて分布したとされる屯倉地域の中心にあたり、古墳時代から古代にかけての地域開発で重要な位置を占めたようです。

近年の発掘調査で、古墳時代の幕開けから古代、そして中世にいたるこの地域の変遷過程が明らかとなりつつあります。今回の企画展では、2012年度の調査成果を基に、保津・宮古遺跡とその周辺で展開した古墳時代の集落変遷と水田開発の拡がりを探ります。

❶ 羽子田遺跡(第37次調査)

古墳時代前期の集落と墓域を有する遺跡で、古墳時代中・後期には古墳群が形成されます。

〔調査期間〕

平成24年4月9～19日

〔主な遺構〕

弥生時代後期・満1条

古墳時代初頭：

方形周溝墓？1基、
土坑1基、小溝3条 ほか

〔主な遺物〕

弥生土器、土師器、須恵器、
木製品など



❷ 宮古北遺跡(第15次調査)

古墳時代前期の2条の溝で方形に区画された集落遺跡です。

平成21年度に実施した第15次調査では、古墳時代の井戸から朱精製に関係する遺物などが出土しました。

それらの中から、保存処理が完了した円板状木製品を展示します。



❸ 保津・宮古遺跡

町内でも古くから人が住み始めた遺跡で、寺川と飛鳥川に挟まれた一帯を代表する集落です。

第1次調査では古墳時代初頭の遺物が多量に出土し、特に木製盾は、ほぼ完全に復元できる良好な資料です。



❹ 十六面・薬王寺遺跡(第30次調査)

弥生・古墳時代の集落や古代の水田、中世の居館跡などが確認されている複合遺跡です。

〔調査期間〕

平成24年4月23日～7月17日

〔主な遺構〕

古墳時代・磐穴住居5基

平安時代・井戸1基 ほか

〔主な遺物〕

縄文土器、弥生土器、
土師器、須恵器、瓦、木製品
など



❺ 多遺跡(第25次調査)

弥生時代の拠点集落で、その後の古墳時代・奈良時代の遺物も多量出土しています。遺跡中央には延喜式内社・多神社が鎮座します。

〔調査期間〕

平成24年6月25日～26日

〔主な遺構〕

弥生時代・満2条

古墳時代中期・満1条

〔主な遺物〕

弥生土器、土師器、須恵器、
瓦器など

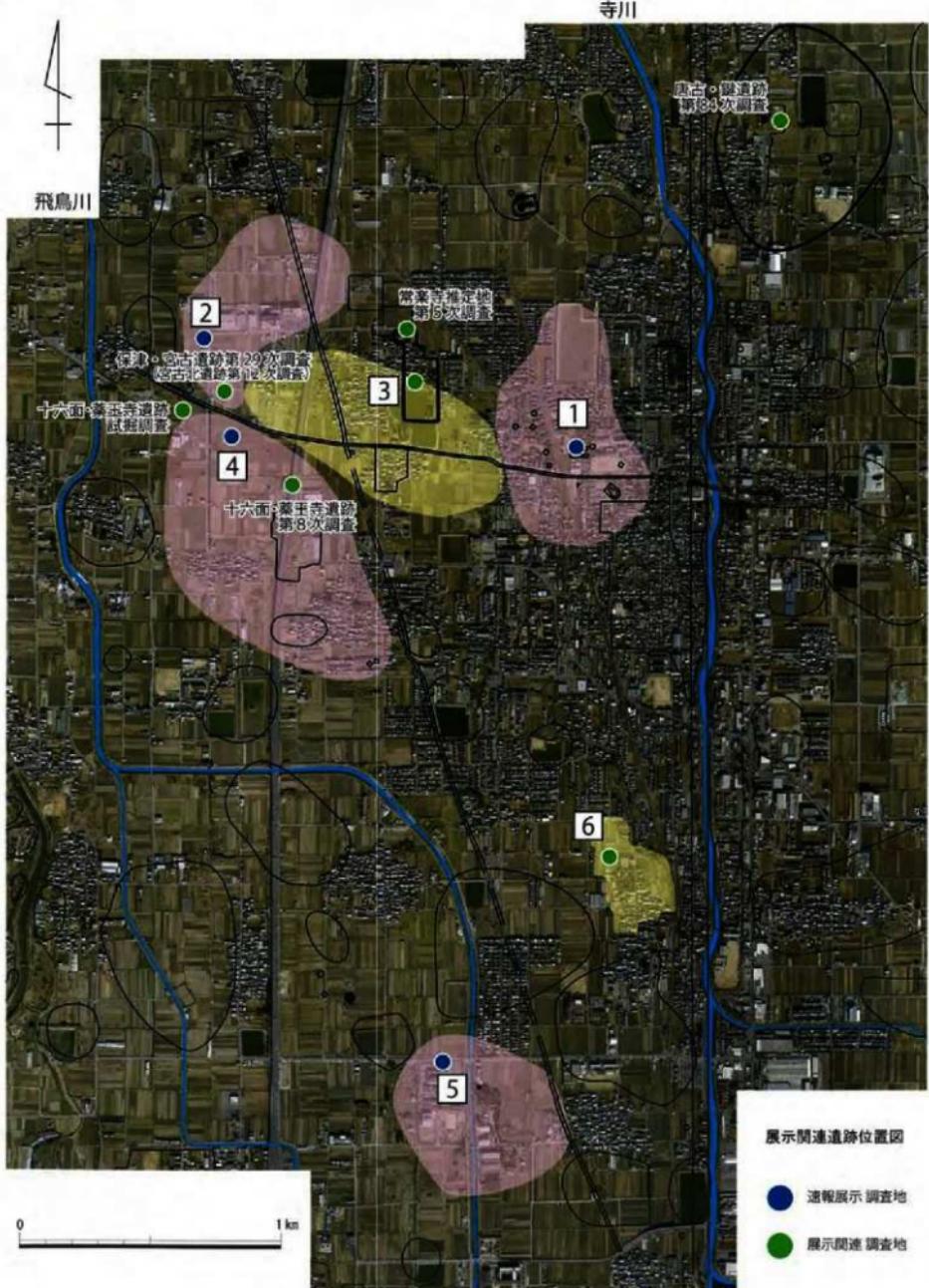


❻ 秦楽寺遺跡

古代氏族秦氏の拠点があつたとされる遺跡で、現在も残る秦楽寺は能楽ゆかりの寺院としても有名です。

秦氏は渡来人の血を引く家系ですが、この遺跡から韓式系の土器が出土していることからもその関係がうかがわれます。





速報展示1 一盆地中央部の古墳時代の幕開けー

羽子田遺跡の方形周溝墓 第37次調査

集落域中央で検出した古墳時代初頭の墓

羽子田遺跡では、これまでの調査から田原本小学校及びその西側付近を中心に集落が抜がると想定していました。しかし、集落想定範囲の中央には微低地があり、古墳時代初頭の方形周溝墓も築造されていたことが明らかとなりました。古墳時代初頭の羽子田遺跡はいくつかの居住域に分かれていたようです。

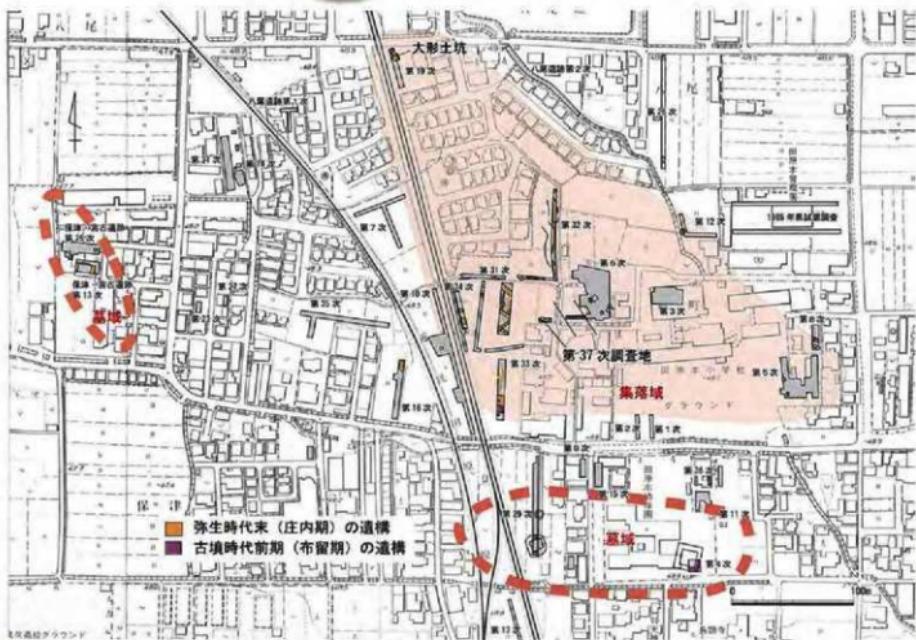


羽子田遺跡第37次調査 調査地全景(西から)



各遺構から出土した土器

左奥：弥生時代後期中頃の溝から出土した壺
中央：弥生時代後期末の井戸から出土した壺
右前：古墳時代初頭の溝から出土した壺



弥生時代末～古墳時代前期の羽子田遺跡

羽子田遺跡の盛衰

古墳出現前夜の奈良盆地では、多数の新しい集落が誕生します。また、弥生時代を通じて地域の中核となった唐古・鍵遺跡などの「拠点集落」の環濠が埋められ、衰退する現象もみられます。

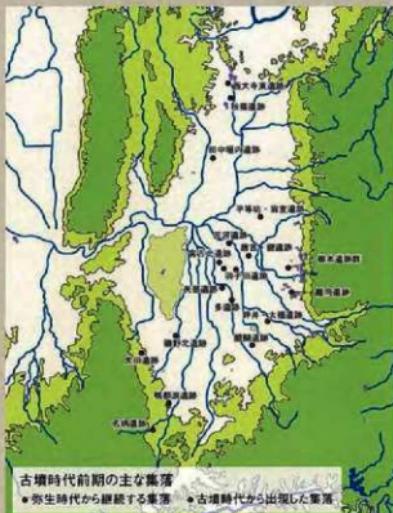
中国の史書「魏志倭人伝」で倭国が大いに乱れたとされる時期に相当するにもかかわらず、緊張関係はあったものの奈良盆地周辺は安定して耕地を拡大し、生产力と経済力を高めていくことに成功したようです。これを基盤として、箸墓古墳に象徴されるヤマト王権が成立していったと考えることができます。

古墳時代前期の奈良盆地では、唐古・鍵遺跡をはじめとする拠点集落の系譜を引く集落が地域開発の中核であり続けるほか、新興集落の一部も他地域との交流を活発におこなう大きな集落へと発展しているようです。

弥生時代末期の新興集落の1つが羽子田遺跡です。弥生時代中期と後期にも一時期集落が形成されますが、弥生時代末～古墳時代前期に盛期を迎えます。

弥生時代末～古墳時代初頭(庄内期)には遺跡中央の第31次調査地及び北部の第19次調査地で、次の古墳時代前期前半(布留1～2式期)には遺跡全体で多数の井戸が掘削されます。遺跡西部と南部には同時期の方形周溝墓もみつかっています。

しかし、古墳時代前期になると突如集落は終焉を迎え、集落跡には直径40mの後円部をもつ前方後円墳が築造されました。その後、古墳時代中期から後期にかけて小規模な古墳が多数造られました。



古墳時代前期の主要な集落

●弥生時代から継続する集落 ●古墳時代から出現した集落

古墳時代前期の集落と墓



木製品が出土した大形土坑(上)と木製品(左下)
(羽子田遺跡第19次調査)



直径3.6m、深さ1.6mの大形土坑から、鉤・鍬などの農具・土木具がまとめて出土しました。古墳時代初頭(庄内期)に何らかの儀式がおこなわれたようです。

宮古北遺跡の祭祀遺物 第15次調査

保津・宮古遺跡の北西に隣接する宮古北遺跡では、古墳時代前期前半に方形プランの2重周濠をもつ集落が形成されたようです。1辺100m程度の居館であった可能性もあり、内部構造の解明が待たれます。

なお、この区画の南に隣接する場所で井戸を検出していることから、区画外にも集落遺構は広がるようです。



第15次調査で出土した円板状木製品

平成21年度に出土し、平成22年度事業で保存処理をおこなった古墳時代前期の円板状木製品を、今回初めて展示します。

この木製品は、方形区画の南側に接する井戸から出土したもので、長軸は54.5cmあります。中央には両側からの割り込みによる穴が作られています。

なお、井戸からは朱の精製に使われた可能性がある鉢や小形の円板状木製品なども出土しています。



十六面・薬王寺遺跡の方形周溝墓 試掘調査



宮古北遺跡の南側隣接地、十六面・薬王寺遺跡の北西端で実施した試掘調査で、古墳時代初期の方形周溝墓とみられる溝を検出しました。溝からは山陰系の台付無頸壺や紀伊産の壺などが出土しました。宮古北遺跡の方形区画と時期的に近接することから、両者の関係が問題となりそうです。

溝から出土した土器

右奥が紀伊産の壺、
左手前が山陰系の台付無頸壺
開口部は欠損後、研磨して使用しています。

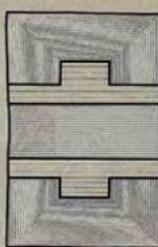
保津・宮古遺跡と近隣の遺跡

戦前から「保津遺跡」の名で知られた弥生集落「保津・宮古遺跡」の実態が徐々に明らかになってきました。この遺跡は、現保津集落の東側を中心とする弥生時代前期の居住域と、宮古池の北側を中心に広がる弥生時代末～古墳時代前期前半の居住域の2つの地区で展開していたようです。その結果として、全体としては広い面積の遺跡となりますが、実態は居住範囲を時期毎に転々としている複合遺跡として理解することができそうです。



木製盾

宮古池の北側で実施した保津・宮古遺跡第1次調査では、古墳時代初頭の井戸から木製の盾がほぼ完全な形で出土しました。盾の表面には細かい孔が多数穿たれ、糸のようなもので補強・装飾されていた可能性があります。孔列の並び方を基に復元すると、石上神宮(天理市)に所蔵される鐵製盾のデザインに酷似していることがわかりました。



木製盾の文様復元図(左)と文様部拡大(右)



盾とともに出土した土器(保津・宮古遺跡第1次調査)



井戸から出土した土器(常楽寺推定地第5次調査)

また、保津・宮古遺跡の北部に重複する常楽寺推定地の第5次調査では、古墳時代前期前半の井戸から山陰系の壺などの土器が出土しました。このほか、宮古池の拡張時に弥生時代後期～古墳時代初頭の土器も出土しています。宮古池の北側付近が一定のまとまりをもった集落域となりそうです。

一方、保津・宮古遺跡の西部では、北西～南東方向の溝が弥生時代末頃に掘削されました。総延長は500m以上あるとみられ、微高地を縱断する水路のような役割が想定されます。

速報展示3 一古墳時代前期後半の集落一

十六面・薬王寺遺跡の住居跡 第30次調査

十六面・薬王寺遺跡第30次調査では、古墳時代前期後半の竪穴住居5棟以上、井戸1基、土坑5基などからなる小規模な集落を検出しました。この集落は古墳時代中期初頭～前半(布留3～4式)にかけての短期間で廃絶したようです。保津・宮古遺跡や宮古北遺跡でも同時期の集落遺構がみつかっており、近接するいくつかの集落が一体となって地域開発をおこなったのでしょうか。

調査では、滑石製白玉や管玉等を作っていたとみられる古墳時代前期末～中期初頭頃の竪穴住居跡を検出しました。1辺4mほどの小規模な竪穴住居ですが、玉の未成品や失敗品などが多数出土しました。また、隣接する小土坑から滑石の素材剥片が出土しました。県内の玉製作遺跡としては比較的古い事例です。



古墳時代前期末～中期の集落(上が北)



1号住居 遺物出土状況(北から)

1号住居などから出土した滑石製玉類未成品

右列が滑石管玉未成品、中央手前が臼玉製品及び未成品。奥列は住居に隣接する小土坑から出土した滑石の素材。





井戸から出土した土器

井戸SK-3154からは、古墳時代中期初頭(布留3式頃)の土器が多數出土しました。



土坑から出土した土器

圓丸長方形の土坑SK-3160からは、古墳時代中期前半(布留4式頃)の土器が多數出土しました。

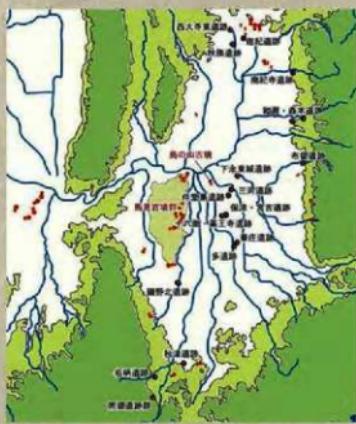


古墳時代前期後半の集落再編

古墳時代前期後半になると、難向遺跡の遺構が減少し、オオヤマト古墳群では新たな大王墓の築造がなくなり、主な大王墓は盆地北部、そして河内地域で築かれるようになります。

この現象は、集落の再編という形で奈良盆地全体に大きく影響したようです。弥生時代以来続いている拠点集落の系統を引く集落は大半が大幅な衰退をみるほか、羽子田遺跡のように集落城から古墳の築造される墓城へと変化する遺跡もみられます。一方、保津・宮古遺跡や十六面・秦王寺遺跡では古墳時代中・後期の比較的まとまった集落遺構が検出されています。

奈良盆地中央では、古墳時代前半末に全長200mの大型前方後円墳「島の山古墳」が築造されました。葛城地域の馬見古墳群の一部とする意見もありますが、近年では大和川木系の重要な地点を抑えたヤマト王權に深く関わる人物の墓とも考えられています。羽子田遺跡や保津・宮古遺跡でみられた集落の変化は、この古墳の築造も大きく影響していたかもしれません。



奈良盆地の古墳時代中期集落と主な古墳

速報展示4 一古墳時代中期の集落一

多遺跡で出土した初期須恵器 第25次調査

多遺跡は、弥生時代を通じて栄えた拠点集落です。この遺跡は、多くの弥生時代以来の拠点集落が古墳時代前期で衰退するのに対し、古墳時代～奈良時代にも継続することが確認されています。

遺跡の中心には、古代氏族「多氏」の祖などを祀る式内大社「多坐弥志理都比古神社」が鎮座し、多氏の根拠地だったとされます。ただし、多遺跡が直接多氏に関わる遺跡となるかどうかは判っていません。

遺跡北端での下水道工事に伴って実施した第25次調査では、古墳時代中期の溝から韓式系土器や初期須恵器を含む多数の土器が出土しました。古墳時代の多遺跡の繁栄の一端を知ることができる貴重な資料となりそうです。



土師器高环



土師器瓶



韓式系土器



初期須恵器

十六面・薬王寺遺跡の韓式系土器 第30次調査

十六面・薬王寺遺跡第30次調査では、古墳時代中期頃の包含層から韓式系土器が出土しました。

調査地は、古墳時代中期前半の集落廃絶後、河川の氾濫原となって厚い包含層が形成されます。最終的には飛鳥時代に河川が固定化して耕地となります。それまでの過程で古墳時代中期後半～古墳時代後期の土器や馬の遺体が投棄されることもあったようです。

今回出土した韓式系土器は、集落廃絶後に投棄された遺物の一つとして捉えることができそうです。ただし、中期前半の集落に伴う遺物だった可能性もあり、詳細な時期の検討が必要となりそうです。



渡来系文物の流入

韓式系土器が出土する遺跡

古墳時代には、大陸からの玄関口となった河内などの大阪湾沿岸、ヤマト王権の政治的中心地となった奈良盆地内各地に大陸からの渡来人が数多く居住しました。

田原本町でも唐古・鍵遺跡、多遺跡をはじめ、秦楽寺遺跡や保津・宮古遺跡などで韓式系の土器が出土しており、渡来人との関わりをうかがわせます。このように渡来人により大陸の技術・知識が大量に持ち込まれたことも、この地域が発展してきたことは無関係ではないでしょう。

唐古・鍵遺跡

唐古・鍵遺跡第84次調査では古墳時代後期の方墳がみつかり、その周濠から須恵器とともに韓式系土器が出土しました。

写真の韓式系土器は広口短頸壺で、朝鮮半島西南部から持ち込まれたものと考えられます。



秦楽寺遺跡

秦楽寺遺跡第4次調査では、古墳時代の須恵器とともに韓式系土器が出土しています(写真手前の破片7点)。

この遺跡は渡来人の血を引く古代氏族である秦氏と深い関わりがあると考えられており、渡来人や渡来系土器を知るためにさらなる調査が待たれます。



保津・宮古遺跡

保津・宮古遺跡第29次調査でみつかった落ち込みの肩から、土師器や須恵器に混ざって韓式系土器の盒(写真左端)が出土しました。朝鮮半島西部(百济)のものと思われます。

また、ともに出土したこれら須恵器の時期は5世紀中頃と考えられ、田原本町内の須恵器としては最も古い部類に入ります。



速報展示5 一飛鳥時代の水田開発一

十六面・薬王寺遺跡の耕作遺構 第30次調査

十六面・薬王寺遺跡第30次調査では、幅20m前後の蛇行する河川と、これに注ぐ古墳時代末頃の小溝を検出しています。小溝は耕作に関わる導水路とみられ、4~5世紀の集落が廃絶した後の調査地は水田となったことがわかります。

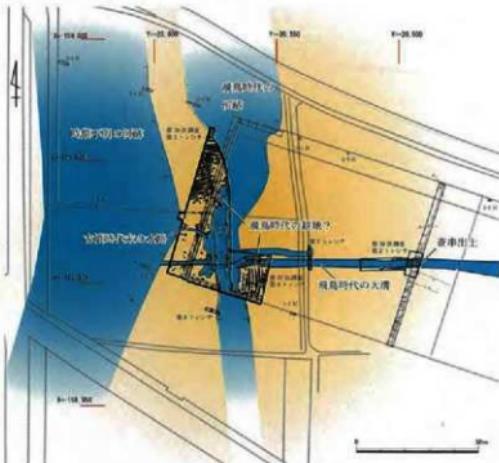


古墳時代末頃の溝(東から上)と溝から出土した土器(右)

また、飛鳥時代にも河川から分岐する水路とそれに直交する小溝群が掘削されました。これも水田耕作に関わる遺構でしょう。



飛鳥時代の耕作関連遺構(北西から)



飛鳥時代の土地整備

飛鳥時代は、多数の渡来人と共に中国大陆からさまざまな知識がもたらされ、国家の体制が急速に整備されていった時代です。中国の都城に倣って方位を意識した宮都が造営され、奈良盆地全体に計画道路が整備されていったのもこの時代です。

飛鳥時代の田原本町周辺は、飛鳥の都からやや離れた場所であり、道路数も減少します。ただし、宮古北道路では仓库群がみつかっており、何らかの官衙的な施設が設置されていた可能性があります。



第2トレーナー大溝出土 茄串



第2トレーナー 飛鳥時代の大溝(東から)

なお、条里制地割りに一致する東西方向の大溝1条が河跡の西側及び東側でみつかっており、耕地開発とともに開削された可能性があります。条里地割りを意識した溝が都城域を大きく離れた田原本町域で掘削されたことの意味は非常に大きいと考えられます。溝からは土師器・須恵器のほか、茄串3点も出土しました。



大溝及び河跡から出土した土器

右から2点目は大溝から、その他は河跡から出土した。



十六面・薬王寺遺跡北部の第8次調査では、飛鳥時代前後の水田造構がみつかっています。洪水により流された砂が水田を覆うことで、偶然当時の水田面がそのまま残ったものです。北西-南東方向を主軸とする畦畔と、牛馬及び人の足跡を確認しました。水田は1区画が小さく、弥生時代以来の小区画水田だったようです。

速報展示6 一奈良・平安時代の宮古地域一

十六面・薬王寺遺跡の建物群 第30次調査

奈良時代には、飛鳥時代に引き続いて宮古北遺跡で建物群が検出されているほか、保津・宮古遺跡西部でも多数の建物跡を検出しています。この地区では、発掘調査で硯や墨書き土器など当時の役人層に関わる遺物が出土しています。保津・阪手道と筋道が交差する交通の要衝として、官衙的な施設が置かれていた可能性があります。

宮古北遺跡や保津・宮古遺跡の南側に隣接する十六面・薬王寺遺跡第30次調査では、飛鳥時代の河跡が埋没した後に多数の建物が建てられていたことが判明しました。北東に隣接する保津・宮古遺跡でも、飛鳥～奈良時代の建物群が見つかっていますが、これらの建物群の性格はわかつていません。

なお、検出した奈良時代の柱穴から、平瓦片のほか蓮華文の軒丸瓦1点が出土しました(右下写真)。柱の沈下を防ぐ根がらみとして転用されたもので、同様の目的で瓦片を敷き詰めた柱穴があわせて3基確認されています。



柱穴に埋められた壺

1箇四方の建物の柱穴から出土した壺です。外反する口縁部の特徴から、内地域で流通したタイプと考えられます。



軒丸瓦

礎石のかわりとして柱穴の底に置かれた奈良時代の軒丸瓦です。特徴的な文様は、平城宮の東配などに出土例がありますが、なぜ十六面・薬王寺遺跡で出土したのか、今後の検討が必要です。



奈良市教育委員会「平城京・藤原京出土軒丸瓦形式一覧」1998
より6075Aの軒丸瓦



平安時代前期の井戸

十六面・薬王寺遺跡第30次調査では、10世紀頃の井戸1基を検出しています。直径2.5m、深さ1.4mで、曲物容器を3段以上積み重ねて井戸枠としていました。

田原本町周辺の平安時代前期の様子はあまりわかつていませんでしたが、本調査地では奈良時代の建物群に引き続いで平安時代前期にも何らかの施設が存在した可能性があり、その位置づけを検討する必要があります。

庄園の発達

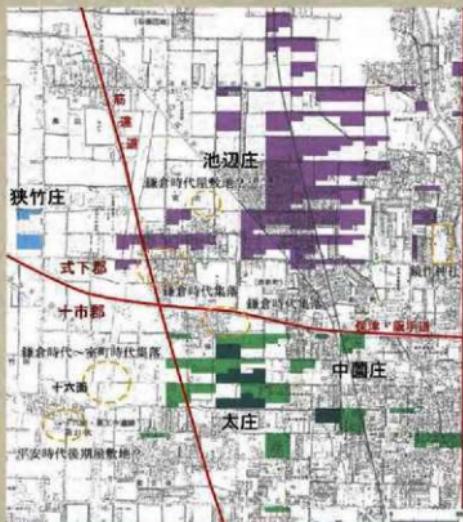
平安時代後期には、中央貴族の力が衰え、寺社勢力が増大した結果、奈良盆地全体で興福寺難役免庄が増加します。

保津・宮古遺跡周辺では、現保津領に中園庄が、宮古領に池辺庄の田地が広がっていました。両者は式下郡・十市郡の郡界となる保津・阪手道できれいに分かれています。

なお、現宮古池周辺は庄園の空白地となっています。中世の集落遺構が多数検出されるため、屋敷地となっていたようです。

一方、十六面集落とその周辺は庄園の空白地となっています。平安時代後期以来の集落遺構はみつかっていますが、何らかの事情により興福寺の庄園には取り込まれなかったようです。

「興福寺難役免庄坪付帳(1070年)」による
庄園の分布模式図



平安時代後期の井戸(十六面・薬王寺遺跡第21次調査)

十六面・薬王寺遺跡第21次調査では、平安時代後期の遺構として、曲物を7段以上重ねた井戸枠をもつ井戸、墨書きのある山茶碗や箸・扇子などが出土した素掘りの井戸などを検出しています。この地区の遺跡の性格は未だよくわかつていませんが、箸や扇子を用いるやや身分の高い人物が屋敷を構えていた可能性があります。

このほか、平安時代後期の遺構としては、保津・宮古遺跡の各地で井戸などを検出しています。集落城としてのまとまりはまだ発生していない可能性がありますが、次第に集村化が進んで鎌倉時代の集村、室町時代の環濠集落へと発展することになります。



十六面・掌王寺遺跡試掘調査
山地系の台付無把壺

凡例

- 本書は、唐古・鍵考古学ミュージアム平成25年度春季企画展「たわらもと2013発掘速報展」の展示図録として作成しました。
- 本図録と展示構成は、一部異なるところがあります。また、掲載写真は展示品の全てではありません。
- 関連事業として、4月20日(土)に報告会を予定しています。
報告会「平成24年度の発掘調査成果について」清水琢哉(田原本町教育委員会事務局文化財保存課)
- 展示および図録の作成に当たっては、下記の機関ならびに個人の方からご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。
機関 奈良文化財研究所／奈良市教育委員会／桜井市教育委員会
個人 青木敬／石田由紀子／池田裕美／池田富貴子／中島和淳／板崎／丹羽恵二／広瀬時晋／宮崎正裕／三好美穂
写真 佐藤右文
- 本図録・企画展は、清水琢哉が担当し、森田三郎・西岡成見が協力しました。

会期 2013年4月20日～5月26日

平成25年度 春季企画展 「たわらもと2013発掘速報展」

唐古・鍵考古学ミュージアム 展示図録 Vol.15

発行日 / 2013年4月20日 発行 / 田原本町教育委員会

編集 / 唐古・鍵考古学ミュージアム 〒636-0247 奈良県橿原市田原本町藤手233-1